

## 3

## 月ヶ瀬 飛驒の匠碑

つきがせ ひだのたくみひ

飛鳥時代

月ヶ瀬 飛驒の匠碑



時代

飛鳥時代

場所

飛驒市河合町月ヶ瀬

帰化人である鞍部多須奈<sup>くらべのたすな</sup>が用材を求めて飛驒入りし、天生山中<sup>あもうさんちゅう</sup>の月ヶ瀬（飛驒市河合町）に住む九郎兵衛の娘「忍」と結ばれて子供を授かった。生まれた子は鳥のような首をしていたので「鳥」と名付けられたという。その後、鳥は17歳で大和へ旅立ち、父多須奈に技術を習って彫刻師となって法隆寺の釈迦三尊像など数々の名作を刻み、止利仏師として名を残している。また、飛鳥寺（法興寺）の日本最古の仏像といわれる飛鳥大仏、釈迦如来像（606年）も止利の作といわれる。「日本書紀」は、止利仏師の父を鞍部多須奈、祖父を鞍作司馬達等と記している。司馬達等は大陸からの渡来人といわれる。

飛鳥時代1番といわれる仏師であることは美術史の通りであるが、飛驒市河合町には、止利仏師の生誕地としての伝承が長い年月にわたって伝えられてきた。それを実証する確かな史料は残っていないが口伝により、河合町の月ヶ瀬には飛驒匠の碑が建ち、近くを流れる小鳥川には多須奈淵、忍岩、神女の泉などの名がつく場所がある。また、天生には多須奈が飛驒入りした際に山が荒れるのを鎮めるため、聖徳太子像を祀ったという聖徳太子堂跡の碑も建てられた。天生峠の匠堂では匠祭りが行なわれ、止利仏師生誕伝説を今に伝える勇壮な匠太鼓があり、止利仏師生誕伝承による飛驒の匠発祥の地として認識されている。



月ヶ瀬 看板



月ヶ瀬橋



飛騨の匠碑 看板



飛騨の匠碑への道



飛騨の匠碑 正面



飛騨の匠碑 右から



## 4

## 飛鳥大仏

あすかだいぶつ

飛鳥  
時代

飛鳥大仏



時 代

飛鳥時代

場 所

飛鳥寺：奈良県高市郡明日村飛鳥 682

重要文化財 1940 年指定、名称「銅造釈迦如来坐像（本堂安置）1 軀」、像高は 275.2cm

『日本書紀』や『元興寺縁起』に見える「鞍作鳥（止利仏師）」作の本尊像で、後世の補修がある。鞍作鳥は、法隆寺金堂本尊「釈迦三尊像（623 年作）」の作者でもあり、法隆寺の像の光背銘には「司馬鞍首止利」とある。

飛鳥大仏像の完成は、『元興寺縁起』による 609 年完成説が定説で『縁起』によると、当初、像には脇侍像があると記される。現在、大仏坐像の下方にある石造台座には両脇侍像用とみられる枅穴が残る。鎌倉時代の建久 7 年（1196）の落雷のための火災で甚大な損害を受けた。奈良国立文化財研究所は昭和 48 年（1973）に坐像の調査を行ない、その結果、当初部分と考えられるのは頭部の額から下、鼻から上の部分と、右手の第 2～第 4 指のみだとされた。2012 年 7 月に早稲田大学の大橋一章らの研究チームが行った調査結果によると、現存像の大部分が造立当初のものである可能性が高いとした。また鑄造専門家の調査でも銅を複数回注いだ継ぎ目の跡があり、奈良時代以前の技法と推定している。

『日本書紀』によれば完成後、丈六銅像を元興寺金堂に安置しようとしたところ、像高が金堂の戸よりも高くて入らないので、戸を壊そうと相談していたところ、鞍作鳥の工夫によって、戸を壊さずに安置することができたという挿話が記述されている。



飛鳥寺 入口



飛鳥寺 本堂



本堂 軒裏



飛鳥大仏（国指定重要文化財）



飛鳥大仏 上部



飛鳥大仏 手元



5

## 法隆寺

ほうりゅうじ

飛鳥時代

法隆寺



時代

飛鳥時代

場所

奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内 1-1

607 年（推古 15 年）、聖徳太子こと厩戸皇子（<sup>うまやどのみこ</sup>用明天皇の皇子）が父・用明天皇のために創建した。聖徳太子は推古 9 年（601 年）、飛鳥からこの地に移ることを決意し、「斑鳩宮」の建造に着手、推古 13 年（605 年）に斑鳩宮に移り住んだ。法隆寺の東院の場所が斑鳩宮の跡地である。

法隆寺の境内は全体が築地塀に囲まれ、西院と東院に大きく分かれる。寺の中心である西院伽藍には国宝の建物群、五重塔と金堂が並び、中門と大講堂をつないで回廊が囲む。東に向かって東大門を抜けると夢殿のある東院伽藍が広がる。国宝・重要文化財の建築物は 55 棟に及ぶ。また、仏教美術品の数は国宝だけで 38 件・150 点、重要文化財を含めると 3104 点にもなる。

法隆寺西院伽藍は現存する世界最古の木造建築群であるが、聖徳太子（622 年没）在世時の建物ではなく、創建時の伽藍が天智天皇 9 年（670 年）に焼失した後に再建されたものであるということが発掘調査、年輪測定によって明らかになった。

国宝釈迦三尊は金堂の本尊で、光背の裏面に銘文が刻されている。この光背銘によれば、釈迦三尊像の作者は、<sup>しばくらすくりとりぶつし</sup>司馬鞍作止利仏師（鞍作止利）である。止利は鞍作多須奈の子で、<sup>しばたつと</sup>司馬達等の孫である。達等は『日本書紀』によれば継体天皇の時代に渡日した漢人で、止利は渡来人の子孫ということになる。一族は「鞍部」（鞍作）を称し、鞍などの馬具製作の技術者集団だったようで、その金工技術を仏像製作に応用したものと考えられている。



法隆寺 金堂（国宝）



金堂 軒裏



金堂 軒裏



法隆寺東院夢殿（国宝）



夢殿 軒裏



夢殿 瓦

6

## 寿楽寺

じゅらくじ

飛鳥時代

寿楽寺



時代

飛鳥時代

場所

飛騨市古川町太江 2872

『日本書紀』<sup>しゅちやう</sup>朱鳥元年(686)の記事に、大津皇子謀反事件に関与したとして、新羅の僧・<sup>こうじん</sup>行心(幸甚)が飛騨国伽藍へ流された事件がある。行心は死罪を免じられ、飛騨国の寺院に流された。大津皇子は天武天皇の第3皇子で、文武に優れた人物であった。異母兄弟の草壁皇子が皇太子であるのに対し、大津皇子は太政大臣となり、政治的野望を持つ者が大津皇子の下に集まった。天武天皇の死後、大津皇子は謀反の疑いで捕えられて自害している。行心が流された飛騨国伽藍は寿楽寺廃寺で、行心は子隆観を伴って配流された。16年経って免罪されて隆観は都へ戻ったが、行心の生死については明らかではない。

寿楽寺跡地は道路改良に伴い、岐阜県教育文化財団が平成10～12・15年度の4次にわたり発掘。結果、講堂基壇跡と回廊遺構が発見された。また回廊西に接して礎石建物跡、さらに西には竪穴建物跡群も確認している。礎石建物は僧坊、竪穴建物群は周辺集落と推定された。なお、伽藍中枢部は現在寿楽寺本堂の建っている場所と考えられ、本堂背後に地表面が盛り上がる区画があって、金堂と塔跡の可能性がある。

硯、<sup>すずり</sup>鴟尾、<sup>しび</sup>瓦類、「高家寺」<sup>たかや</sup>の墨書がある須恵器など寺院と深くかかわる遺物が出土。瓦では飛鳥時代の瓦7種が出土し、尾張元興寺跡で出土している<sup>たんべんろくようになとうれんげもんのきまるがわら</sup>単弁六葉忍冬蓮華文軒丸瓦と<sup>れんじやうおうびきしじゅうこもんのきまるがわら</sup>簾状押引四重弧文軒平瓦がセットで出土している。





寿楽寺 入口



寿楽寺に続く道



寿楽寺 本堂



本堂 右側



本堂 左側



軒裏



7

## 飛驒町

ひだちょう

飛鳥  
時代飛驒  
町

時代

飛鳥, 奈良時代

場所

奈良県橿原市飛驒町

飛驒町一帯には飛鳥、奈良時代、木工に秀でた多数の飛驒匠が飛驒から招集され、日本初の都城・藤原京造営のため長く住んでいたと伝えられている。

藤原京造営が終わったあとの天平勝宝 8 年 (756) に、孝謙天皇が当地の「飛驒坂所」と呼ぶ領地を南都・東大寺に与えた。その書き付けが内閣文庫所蔵の東大寺文書として残っている。当時すでに「飛驒」の地名が定着していたことになる。

東大寺領はその後、幾多の変遷を遂げながらも鎌倉時代の後期まで領有が続くが、室町時代の後期に至って当地の豪族・越智氏の支配下に入ってゆく。

江戸時代の初めごろから「飛驒村」と呼ばれた当地は、幕府や郡山藩などの領域となったあと、延宝 7 年 (1679) に再び幕府領となった。

明治 22 年に鴨公村の大字となった同地が、昭和 31 年の橿原市発足により飛驒町となった。上飛驒町の区域は、東西約 450 m、南北約 560 m。飛驒町は上飛驒町の西側に隣接、東西約 260 m、南北約 460 m である。上飛驒町区域の北端に国指定史跡の藤原京朱雀大路跡がある。

奈良における「飛驒」の地名は、古代朝廷に全国の各地から動員された人々が、出身地国名を奈良の居住地名に使った名残である。



飛驒町 看板



上飛驒町 看板



上飛驒町集会所 看板



藤原京朱雀大路跡



藤原京朱雀大路跡



藤原宮跡